

# 音楽情報科学研究会 30 周年記念イベント： 初代主査平田圭二先生特別講演

片寄 晴弘<sup>1,a)</sup> 後藤 真孝<sup>2,b)</sup> 竹川 佳成<sup>3,c)</sup> 平田 圭二<sup>3,d)</sup>

**概要：**情報処理学会音楽情報科学研究会 (SIGMUS) が発足して 30 周年を迎えた。この機会に本研究会の 30 年の歩みを振り返るとともに今後の発展について展望する。

## 1. はじめに

音楽情報科学研究会 (音情研 / SIGMUS) は準備段階を経て、1993 年より情報処理学会の研究会としての活動を開始した。

音情研はメディア知能情報 (MI) 領域の主要研究会の一つとして成長しつつあるが、音情研の設立当時 MI 領域はフロンティア領域と呼ばれ、IT 分野の新しい研究領域のインキュベーションのための領域としての役割を担っていた。その当時、フロンティア領域では、AI、Computer Vision、音声、自然言語等を対象領域とする既発研究会<sup>\*1</sup>が活動しており、音情研は、1989 年 8 月より研究会の準備段階の研究グループとしての活動を開始、準備期間を経て 1993 年 4 月から情報処理学会の研究会として活動することとなった<sup>\*2</sup>。

本年度で音情研が活動を始めてから 30 周年を迎えた。また、初代主査を務めた平田圭二先生が現職 (公立はこだて未来大学) での退任を迎えられる年次にあたり、研究会設立 10 周年イベントとして実施した領域の展望 [1], [2], [3] に対しての答え合わせとともに、本領域の将来のさらなる発展に向けての議論のきっかけとなることを願い、本企画

を準備した。

## 2. プログラム

音楽情報科学研究会 30 周年を記念し、研究会の立ち上げから 30 年間の歩みまでを振り返るものとして 3 部構成のプログラムを用意する。

### 第 1 部：音楽情報科学 (音楽情報学) 「ない」から「あり」へ (モデレータ：片寄晴弘、回答者：平田圭二)

研究発表をしたり議論をしたり、国際会議情報を共有しあったり、当たり前前の学会活動もかつては当たり前のこととしてできるものではなかった。また、音情研設立当時、当時の日本の工学的価値観では役に立つことや効率化が優先事項、音楽は趣味の対象と見做されており、研究の対象とするにあたってハードルがあった。

第 1 部では、研究領域立ち上げ当時の状況や平田先生のご尽力について、「どう動いた? KELJI」と題して、具体的には以下の視点でお話をうかがっていく。

- 無いところからの組織作り (1985~1989 年あたり)
- 国際的なプレゼンスの確保 (1989~1993 年あたり)
- 国内情報処理研究領域としての地位確保 (1993~2003 年あたり)

### 第 2 部：平田圭二先生特別講演 (司会：後藤真孝)

第 2 部では、平田先生のこれまでの研究活動について、音楽への想い、研究価値観を含めてお話いただく。

### 平田圭二：「We Love Music」

私は、この 30 年間、計算機があるからこそできる音楽に関する研究とは何かを考えてきた。芸術の手段としての音楽、感性を表現するための音楽を、科学や工学の俎上に乗せることはできないか。音楽を聴いたり演奏する人間の脳

<sup>1</sup> 関西学院大学

Kwansei Gakuin University

<sup>2</sup> 産業技術総合研究所

National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)

<sup>3</sup> 公立はこだて未来大学

Future University Hakodate

a) katayose@kwansei.ac.jp

b) m.goto@aist.go.jp

c) yoshi@fun.ac.jp

d) hirata@fun.ac.jp

\*1 研究会名称は時代の要請にあわせて発展的に改称されてきている。

\*2 音楽情報科学研究会は 1985 年から 1993 年まで任意団体としての活動歴がある。

の中では、記憶、学習、識別、連想、注意、予測などが働いているはずであり、知的活動の一つとして見なすことはできないか。人や社会にとっての音楽の役割や意味を追究することで、人や社会自体をより深く理解できないか。もしその研究分野を音楽情報学と呼ぶとしたら、音楽情報学が幸運だったのは、数百年に渡る音楽学の蓄積が使えること、音楽は自然言語と対比して語られること、音楽は多種多様な学際領域を生み出せることであると思う。私は、音楽はまだ奥深いと感じるので、計算機という道具を得た我々は、この音楽情報学を拓く端緒についたばかりなのだろうと思っている。

### 第3部：全体討論（パネリスト：平田圭二，片寄晴弘，後藤真孝，竹川佳成）

フロアを交えて全体討論を実施する。

### 3. おわりに

本企画により、音楽情報科学コミュニティを現在進行形で支えられる立場にある方、かつてコミュニティを支えてこられた方が親交を深めあい、語り合いを通じて新たな展望を開くきっかけとなればこれ以上に嬉しいことはない。音楽情報科学研究領域がさらなる発展を続けていくことを願う。

### 参考文献

- [1] 平田圭二: 誰も聴いちゃいねえ, 情処研報 音楽情報科学 2003-MUS-50-9, pp.51-54 (2003).
- [2] 片寄晴弘, 小坂直敏, 長嶋洋一, 平賀譲, 松島俊明, 菜孝之: 音楽情報科学研究会はどこへ行く - 聴いていますよ。僕にも言わせて下さいな -, 情処研報 音楽情報科学 2003-MUS-50-10, pp.55-60 (2003).
- [3] 後藤真孝, 平田圭二, 片寄晴弘, 平井重行, 浜中雅俊, 武田晴登, 北原鉄朗: パネルディスカッション「音楽情報科学研究者 { に, が } 望むこと」, 情処研報 音楽情報科学 2003-MUS-51-5, pp.25-28 (2003).